

2022《後期》吃音・構音指導講座 参加者『一言感想』集

コロナ禍の中、遠く山形の地まで足を運んでいただき、有難うございました。

先生方の、講座に参加される姿勢に、指導中の方々に対する、お一人お一人の熱意がひしひしと伝わる、そんな講座になったと感じております。

吃音指導講座の実技研修では、何度もダメ出しをされながらも、幾度となく挑戦し続ける姿に、構音指導講座では、ある場面理解への『問い』には、演者が禁句にしたわけではないにもかかわらず、「前の人と同じです。」の発言が、今講座ではほとんど無く、自分なりの答えを出そうと、お一人お一人が真剣に『問い』に向き合う姿に、密かに感動を覚えました。

反面、危険な香りも感じました。新しい『指導方法』、簡単に表現すれば、「やり方」を知ってしまうと、その「やり方」を実行してみたいくなるものです。『知る（知識を得る）』ことは、『できる』ことでは、ありません。ですから、少々きつめの同様のコメントが、金太郎飴のごとく、何回か繰り返し出てくるのは、そのためです。ご容赦ください。

参加者23名中、実に22名の先生方から『一言感想』をいただきました。『一言感想』といたながらも、今回も、お帰りの短い時間の中で、本当に多くの感想、指導中のお子さんに対する想いのあられる感想をお寄せいただき、本当に、本当にありがとうございました。

また、この感想【含：皆さんの感想への梅村の感想やコメント、また、質問に対する回答】を、相談室のHPに掲載することをご了解いただき、ありがとうございます。

【お断り】

① 行替えは、本文と異なる場合があります。

② ※〇〇の記述、及び、【●●】内の記述は、梅村の感想や意見です。

個人の感想に対して、多少厳しいと感じられるコメントを述べさせていただいた箇所が数か所あります。これは、決して、個人へ向けたコメントではありません。本講座に参加された**全ての先生方に考えていただきたい内容**と受け止めて下さい。

③ ご本人の記述（書体=HG丸ゴシックM-PRO）の中で、赤文字にした部分は、他の方にも**考えて頂きたいと思える内容**です。

④ 構音記号は、旧記号です。ご了承ください。

⑤ 個人名は、所属を含めて全て記入しておりません。ですが、おおよその職種があったほうが良いと考え、以下の4種に分類し、番号の後に記しました。

A：通級指導教室（ことばの教室） **B**：病院・福祉関係の言語聴覚士

C：歯科クリニック関係 **D**：その他

なお、自己申告で、次年度から通級指導教室とあった方は、Aにしました。

01A

吃音については、公的研修機関で研修を受けた時以来の研修です。

「波がある。治る人もいれば、治らない人もいる。受け入れる……」ということを知ってきた身なので、今回の内容は、とても驚くことばかりでした。子どもさんや、親御さんの困り感には、まだまだ寄り添えそうにはないのですが、新しい世界を知れたことをうれしく思います。

「プログラム全体像」で具体的な指導のイメージがもてて、本当によかったです。(できるかどうかは別です) **【是非できるようにして下さい!】**

ジャックと豆の木音読検査での『楽な発語を探す』練習が、吃音指導だけでなく子どもの見方、幼児への指導の仕方…と、いろいろな面で役立つことを学びました。本当に、今日学べて良かったです。

02A

前期も参加させていただきましたが、吃音の指導についての話を、理解しきれなかったり、忘れてしまったりしたところを、今回、再度、講座に参加させていただいたことで、すっと落ち着いたところが多々ありました。

私は、まだ楽な声の聞き分けができず、茂さんの5回目の「ジャックと豆の木」を、家でもう一度聞いて、耳を鍛えようと思いました。

共調同時音読も、改めて、子どもに合わせるのは難しいと思いましたが、梅村先生の話をお聞きしたり、直接指導をいただくことで、上手になるかは分かりませんが、やってみよう!という指導意欲がわきました。子どもの笑顔が見られるよう、がんばっていきたいです。

03B

私自身、吃音指導については学生以来きちんと学ぶことが少なかったもので、今回の経験を活かせればなあと思います。

質問ですが、初回の面接の際に、ご本人や親ごさんに対してどのような説明をされていますか? 可能な範囲でおしえて頂けると助かります。

※ この質問についての回答は、不可能です。なぜでしょう?

どのような説明をするかは、どのような相談内容か、また、どのような知識を既にお持ちなのか、本人なり親御さんの吃音像は?等々、このようなことが分かって、その内容に応じて説明します。“情報の世界”ですから一般的な吃音の知識は、既にお持ちです。一般的な事柄を説明しても、口には出さないでしょうが、内心では「そんなこと、ネットで調べて分かっています! うちの子の吃音の状態とこれからどうすればいいのかを聞くために、こちらは相談に来ているんだよ!」との心情を抱かせ、信用を失ってしまいます。

始めることができることもあります。実際の指導に於いては、Bさん、Eさん、Fさん、それぞれ個性が、人格的にも問題像的にもありますから、一般的な指導の流れは実在しないのです。個性に応じて、『**構音指導を行いながら**』状況に応じて想像し、創造していかなければならないのです。構音指導では、『**構音指導を行いながら**』が、最も重要なことなんです。構音を直したいがために通っている、通わせているのですから！

ですから、仮に、子どもに人格的な発達課題があったとしても、そのことが、構音指導を行わない、または、後回しにする理由には、決してならないのです。心したいものです。

今回の講座でも紹介した、『小学3年女児(まりさん)に対する [ʃi][tʃi] の構音(点)指導で、指導開始後約18分で [シ・チ] を出した指導』は、この図で言えば、《①から [ち・し] の**完成**》までに要した時間が、18分だったことを意味しているのです。

まりさんへの指導については、再々度、2023 構音指導講座でも、指導の視聴とその解説を行いたいと考えています。なぜなら、まりさんへの構音(点)指導のプロセスが、『機能的構音障害に於いては、構音の誤り方に一喜一憂するのは止めましょう！ 構音指導の本質は、そこにはないのですから!!』を証明する一翼を担っているからです。

話は、どこに行くのか分からない程、飛びます。

例えば、[ち] の構音(点)指導を始めたとしみましょう。専門書といわれる文献に眼を通すと、丁度 [ち] の構音指導として、構音点の位置や舌の動かし方が書いてあります。「しめた！ こうやると [ち] が出るのか！ 早速やってみよう！」。結果うまくいきません。どうしてでしょう？ 専門書に問題があったのでしょうか？ 違います。その理由は簡単です。子どもの個性を無視して、書いてあることをそのままやらせようとしたからです。

さて、右のQRコードは、現職中に、山形県言語障害児教育研究会で編集した「ことばの教室の指導と運営」の中から、梅村が執筆した『第Ⅲ章指導について 1 総論』について、当時の研究会会長さんから承諾を頂き、相談室のHPに掲載させていただいたものです。



内容は、“基礎的な指導上の心得”を中心に“子どもの理解の仕方”“問題の理解の仕方”そして、“実際の指導での心構え”等々です。その中でも、『指導者の心得』として、8項目を挙げ、解説してあります。特に、P56の“**心得5 指導がうまくいっていない理由を「指導方法の限界」にあるような理由にしない**”、そしてP62の“**心得8 指導に対して責任をもつ**”は、是非ご一読ください。

04A

「指導対象者の声」に「指導者の声」を合わせる実技研修をさせていただき、「共調」について少しでも実感できました。ハーモニーではなく「指導者の声」の響が大切だとわかりました。

1回目（前期）の時は、なんか声が合ったかなあ…ぐらいの気持ちだけだったのですが、2回目（後期）は、「共調」の意味が体感できて、参加させていただいて良かったと心から思っています。梅村先生から直接ご指導していただき、自分ではうまく読めたような感覚も、実は遅かったり早かったりで、少し練習したからといって、うまくできないことを実感しています。

私は、日常会話で語尾が強めだということもわかりました。治すことが難しいかも知れませんが…（この年なので）。吃音の子と話す時、指導中は、**極力低い声で（怖くない程度に）話す**よう心がけたいと思いました。

※ どの程度の低い声子どもを怖がらせるかは、ケース・バイ・ケースです。よーく子どもの様子を窺いながら、不自然にならないように留意しましょう。

05B

共調発話の指導を受けたくて参加しました。

前提となる子どもの楽な発話の把握が難しく、本当に感じているのか？正解を知っているから、そう感じているだけなのでは？と、全く自信が持てませんでした。そのためなのか、実際の練習の時、子ども役の方の発話が変わったように感じると、相手役の方が、先生役の様に合わせてくれているのではないのか？と、疑心暗鬼になるしまつ。子ども役の時は、普段とにかく速度を落とす機会だけは多くあり、本来の自分の速度が判らず。先生役の方とのタイミングのずれしか感じられない程のなさけなさでした。

構音についても、姿勢をみる限り「やる気がある」ようにみえても、そこまでのやり取りに、ボレテージは下がっている事に気付かなければ、その見立ては真逆になる訳でー。出会ってから別れる時まで、子どもとの関係が大切な事は判っていても、出来ているかと問われると、出来ないか何度も来てます。一と半ば居直ります。感性の良い先生方にうらやましさを感じつつ。あきらめる訳にはいかないのです。

PS・子どもの時間をムダにうばった担当者を糾弾される時、怒りはごもっともなのですが、すねに傷を今も作りつつある身には、つらいです。

06A

前回もたくさんのお話を学ばせて頂き、つたないなりに自分の指導に取り入れさせて頂いています。

今回の吃音の指導で印象的だったのは、この子どんな子？ということをもっと“訊く”という意識をもって、全身をくまなく観察して何ももらさない様に実態把握する大切さです。まずは、そこからだて再実感しました。見るポイントをしっかりとって“訊く”ということができるようになりたいと思います。

実際に見て頂いての指導も、ポイントを正確に教えてもらって「それだよ！できている。」と言って頂いたときは、本当に嬉しかったです。梅村先生に指導を受けている子の気持ちを、少し味わえた気がしました。

構音指導については、側音化構音の〈チ、シ〉が指導後十数分で出るようになった動画と、流れについての解説もとても勉強になりました。般化についても、教室での指導と日常を分けずに指導する大切さが分かりました。

また、指導室に入って来るところから、出て行くところまでの動画では、一言一言の指導者の声掛けと意図を解説して頂いて、驚きと大きな学びがありました。自分の指導も、このように一つ一つの意図を説明できるようになっていかないといけないと感じました。

07A

〈吃音の指導講座から〉

自分の声の点検、いい声をキャッチする耳の訓練をしていかなければと改めて思いました。以前、吃音を誘発する声だということを教えていただき、少しは意識してトーンをさげようとしていたり、チャカチャカしている行動を、順序立てて落ち着かせようとしてきたとは思っています。しかし、ふと気づくと高いトーンで話す自分に、ゾッとすることもあります。子どもに日常化を求めていくためにも、私自身を変えていきたいです。そして、早く、自分の声への自信の無さのために、相手の心に届かないような落ちる声にならないようにしたいです。

音読練習では、変われる種をいただきました。他地域の方、テンポの違う方…正直合わせられるのかと思うタイプの方と練習していく中で、相手の方から読みやすくなったとおっしゃって頂いたり、スタッフの先生に一部評価頂けたのは、これからまた日常化に向けがんばろうとエネルギーになりました。

梅村先生に教えていただいた時は、指導者としての導く声の部分でした。主張しすぎれば、子どもにとって耳障りになると思いますが、ただ合わせるだけでは、変化を生むことはできない。今回は、自分が思っているよりは、大きめでちょうどだったという感触でしたが、そこを点検しながらでないと、子どもにとって害になると考え、頭がイラストのようになっています。「生き方を変える」という点において、それにふさわしい指導者になれるよう、自己点検とスーパーバイズを大切にしていきたい。

〈構音の指導講座から〉

4月、5月こちらがとても気をつけて指導していた子に対し、夏休み後、子どもの見とり、子どもからの働きかけへの対応など、ルーズになっていることに気づかず、模倣関係を崩しているため、指導が上手くいっていないという現実、危機感がありました。

自分の指導が、いかに粗いもの、偶然に助けられてきて危ういものだったのか、反省しました。必然となる手立て、自己点検、修正を初心に帰って行きたい。

08A

今日は、メモを最小限にして参加しました。梅村先生に教えていただいた通り、見えた世界が全く違うものになりました。また、声をかけていただき、ありがたかったです。これからも、講座に参加していきたいと思います。

問答において、惜しいところまでいくというのは、まだまだ自分自身がつかみきれていないということなので、今後も学び続けていきたいと思います。

※ 実は、中学高校の頃、極端なメモ魔で、B線のノートの1行に、極小の文字で2列にメモを取る程でした。役に立たない情報でした？

09A

子どもに合わせていくタイミングの難しさ、聞きながら聞かせていくバランスのとり方、他諸々、手探りの一日でした。技能の向上は全然まだまだですが、子どもに自信を持たせてあげられるような寄り添い、投げかけを、一歩でもすすめられるように、今日を活かしていければと思いました。さらに、環境作りが8割という先生の熱い語り口に、改めて、見直しが必要だなと感じました。

10A

〈吃音〉

吃音で来室する子どもに“してあげられること”が少し分かりました。

自分の声の調子に気をつけて【凄く大事なことです】、共調同時音読を試してみようと思います。出席者同士で音読の練習をさせてもらい、その様子を見て頂けたことも、勉強になりました。欲を言えば、各テーブルで(もっと欲を言えば、各個人に)先生がお手本の音読を見せて頂けたら、もっとイメージをもって音読の練習が出来るかも知れないと思いました。

〈側音化構音〉

目の前にいる子どもが、どんな子なのか、よく見極めて指導するように、今までより気をつけていこうと思いました。“般化”のポイントが、雰囲気や子どもと指導者の関係にあるのではないか、というお話を聞いて、なるほどと思いました。

今回伺ったポイントを参考にさせて頂き、明後日からの指導に活かしていきます。

11B

大変学ぶことが多くありました。段階的に指導をするやり方、見直したいと思いました。指導中は吃音の症状、随伴症状など、問題になるところばかり見ていました。声の特徴に気づかず、観察するポイントに気づきました。

今まで、吃音児の指導について悩んでおりました。

環境調整が大切ということは分かりますが、調整をしても吃音の症状が落ち着くことは難しく、どうしたら軽減してあげられるのか…何をしてあげるべきなのか…何ができるのか…。吃音症状ができるだけ出ないように、スムーズに話す体験・経験を積み自信をつける関わりが大切と考えていて、思うように指導ができていなかったと思います。

「吃らないようにではなく、吃るようにして少しずつおさえるように」を頭に入れて関わり・指導をしていきたいと思います。

※ 「吃るようにして…」そして「指導をしていきたい」と続くわけですが、講義でお話をしましたが、正確には「例えば、音読指導の際、①自力の音読である程度流暢さが得られたら、②心的プレッシャーを与える、または、H-DAFなどの効果によって非流暢性を誘発するようにしておいて、③ブロックが出そうな瞬間に共調同時音読、もしくは、共調先行発語によってブロックを抑制する方法をとることもある。」と話したと思います。つまり、この指導は、①、②、③の指導技術を身につけて初めて可能な指導なのです。大切なことなので、繰り返します。

“ある指導方法がある”ということと、“その方法で指導を行って良いかどうか”は、別問題なのです。まず、最初に、自分の指導力量を自覚しましょう。次に、目の前の指導対象者さんについて、この指導方法の客観的な適用根拠を考えましょう。この二つの条件が揃って初めて、その方法で指導することが可能なのです。

側音化構音のお子さんを指導しています。とても緊張しやすく、常に肩が上がった状態でした。【大方は、子どもの緊張イコール先生の緊張です。指導者の緊張が緩むと、子どもの緊張感も緩むことを体感できるといいですね。側音化構音だからといって、初めから緊張する子なんて存在するわけではないですから、11B先生でなければ、誰かが緊張感を植え付けたのでしょうか】まずはリラックスをして話せることを目標に関わり、少しずつ口元の緊張が無くなったように感じたことがありました。また、最近ではゲームで勝つと両方の手を挙げて喜ぶ姿もみられ、行動の変化も見られ、単音の子が言えるようになってきています。先生のおっしゃっていた「行動の変化＝構音の変化」に気づくのは、指導において重要だと感じました。【構音指導と共に、お子さんの自己表出が豊かになり、それが構音に変化する力になる。本当に重要なことです】

12B

〈吃音について〉

“「楽な発語の状態」を把握する”は何度やっても難しいですが、その視点を忘れずに、子ども達と関わっていきたくて思いました。子ども達を目の前にすると、吃音症状の方にばかり注目してしまうので、自分の支援【?】を振り返り、今回もまた反省でした。今回の講座では、より具体的に楽な発語について説明して頂け、また、その楽な発語をどのように使っていくのか、知ることができたので、より理解が深まったと思います。子ども達の生きやすさにつながる支援【?】・関わりができるよう、がんばりたいと思います。

〈構音について〉

子どもをよく観察すること、子どもに応じて意図的な関わりをしていくことの大切さを、丁寧に説明して下さい、ありがとうございました。日々の支援【?】の中で、意識して取り組んでいきたいと思います。

※ 本当に“支援”なのでしょうか？ 誰が誰を支援するのでしょうか？ 対象者から指導者が支援されることはないのですか？ 支援するなんて、おこがましいと思いませんか？

13B

一日目吃音では、課題の楽な話し方をしている箇所が、答え合わせと照らし合わせて、こういうことかなと納得させるようにしていました。後半の練習で、こういうことかー！に変わってきました。また、目の前で話し方が影響されるペアの方をみました。子どもたちも、話し方が変わっていく自分に対し、次への意欲や自信がつくことが想像できました。技術を身につけようと強く思いました。

構音の講座では、音の模倣でなくベロの模倣の確認をすること、般化の考え方に自分の思い込みがあり、自分の(指導)のやり方を点検しないといけない！と思いました。帰ってすぐに取り組みます。【その結果を是非に教えてください】

14A

吃音の講座

子どもと音読する時は、共調同時発話法という方法を用いて指導していきたいと思います。

構音の講座

教室の入室、退室の間だけでなく、送迎しながら、子どもとまねっこゲーム等をして般化して日常生活で使いこなすことを目指します。

15A

吃音

“影響を与える声を出す”というのが難しかったです。声が小さい、もっと出しても指摘を受け、出そうとすると力んだり、声を合わせる余裕がなくなっていました。声を出すタイミングを合わせるには、子どもの息をする様子とかをよく観ていると、合わせやすい感じがしました。

※ その通りです。よく気が付かれました。とても重要な観察視点なのです。では、もう少し踏み込んでみましょう。『子どもの息をする様子』とは、具体的には、どんな様子なのでしょう？ どんなどころをどんな視点で観察するとどんなことが分かり、それに応じたどんな留意に基づいたどんな指導が行われると想像、そして創造ができるのでしょうか。

アンパンマンなど、すぐろくの教材を見せていただけて良かったです。先生は「やり方は同じだから、わかるでしょ？」という感じでしたが、いろいろと気づいていない所があると思うので、動画で見せていただけると嬉しいです。

※ 2023 吃音指導講座では、母音に対する Wf の強い年長女児さところさんに対する共調発語指導を『アンパンマン双六』で行った指導の視聴と解説を行う予定です。

指導の“方法論”としては、勿論、大人の方にも十分に適用できます。

構音

般化がなかなか進まない理由が、指導者にあることがよく分かりました。指導だけれども日常をまぜていくのを実践でできるように、また明日から取り組んでいきます。もっと書きたいのですが、時間が……。【そんな時は、遠慮なく FAX で続きを…！】

16A

〈吃音指導講座〉

先生のご指導の映像を、要所要所で止めて、その時先生が何をどのような意図で指導されているのか、細かく解説していただいた点が、とても勉強になりました。先生が解説して下さい初めて気づくところがたくさんありました。

「自分で終了を決断できるように指導していく」「吃音に対する基準が下がると生きやすくなる」「本人の生活をかえる、自信をもてるようにしていく、人をかえる指導が大切」といったお話が、指導の根幹に関わる視点として、自分には押さえが弱かった部分として印象に残りました。今後の指導の中で、大切にしていきたいと思います。

〈構音指導講座〉

「般化の指導、般化が生じる」のお話、「構音(点)指導の基礎的な流れ」の図を使ったお話をお聞きできて有難かったです。般化について、私も大きく誤解していましたし、構音指導をしていく中での土台を得られたよう思いました。（今までは“何をするのか”方法ばかりに目がいていました）講座内容をかえていただいて、ありがとうございました。

「般化を生じさせるような環境づくり」⇒（今までで一番印象に残った大事なことばだと思いました）「この子、どんな子」ということを肝に銘じていきます。

17A

早期改善を目指したいのですが、吃音・構音ともに力不足を感じており、講座を受講させていただきました。

一つ一つの言葉がけに根拠があり、意図があり、それを解説していただけて有難かったです。本を読んでも You Tube を観ても基礎的な事が分かっていないので、構音指導の流れについてもお話を聞け、とても有難かったです。

吃音指導講座は共調発語指導の練習で、梅村先生に指導者役をしていただき、楽に読める感覚に驚きました。自分で実践するのは、とても難しいと思いましたが、子ども側の体験で、台車に乗ったような感じで発話していた感覚を思い出しながら練習したいと思います。

18D

今回、縁があり初めて構音指導講座に参加させていただきました。私は現在、聴覚支援学校の幼稚部を担当していますが、構音指導に関する研修で学んだことがなく、指導への不安を感じておりました。そのため、今回このような貴重な学習の場をいただき、ありがとうございました。

今回の、構音指導講座を受けて、印象に残ったことは、般化につながるかわりに、かわり手になっているかどうかを考えさせられたことです。かわり手の1つ1つの働きかけが、子どもにとって生活の一部になるような働きかけになっているか、指導と生活が切り離されていないか、立ち返ることが大切であると感じました。

また、「毎日が初回だと思って、今日のこの子はどんな子かと思って見る」というお言葉が、日々のやりとりが漫然としたものになっていないか、振り返る心に響く言葉でした。

19A

◎ 般化するためのお話を聞き

- ・その正しい構音を頭の中でイメージできるように、伝えることが足りなかったのか。
- ・前後の会話など、もっと工夫することはあるなと思いました。

◎ 子どものことを、もっと語れるようにしたいと思いました。プログラム、イメージを考えてみます。

何回もお話をお聞きしても、気づかせていただけることが、たくさんありました。

20A

前期に引き続き、参加させていただきました。90回通級していた子を梅村先生が見てから、18分で正音を出せていたのを視聴して、今までの先生たちはどんな指導をしてしまっていたのか？と疑問に思いました。【“今までの先生たち”の中に、先生は、入っているのですか？】子どもやその保護者のことを考えると、早く終了できるような指導ができるようにならなくてはと思いました。梅村先生の「表面だけをまねするだけではダメ」という言葉、先生の言動にすべて意図があるということを理解しました。

どの子ども楽しそうに、いつのまにか正音が身についていたのを見て、私もことばの教室であるような雰囲気を作っていきたいなと思いました。また次回も参加して梅村先生の「技」を吸収していきたいです。

21B

“般化が生じる環境設定”について、自分の臨床【“支援”という言葉ではなく、“治療”という言葉でもない。“臨床”という言葉が、私の仕事の内容や実態にぴったりフィットした言葉なんですね。ですから、“言語臨床教育研究会”なのです】を見直す学びを得ることができました。子どもが主体的に楽しく正音の産生に取り組めるような姿勢作りや、声かけ、ゲーム性の活用など活用させて頂きたいと思います。

音の産生練習については、今まで私が実施してきた方法と大きく異なる点が多く、自分の引き出しが増やせるよう、学びを復習し、子ども1人1人にあわせて導き方を柔軟に対応できるようにしたいと強く思います。できるだけ早期に、できるだけ子どもの負担が少なくなるよう、自身のスキルを磨きたいです。

22B

・「日常生活」で始まり「日常生活」で終わる。ことばの教室を「日常」にするような状況を設定する。訓練でない般化をめざす。

・子どもに決めさせていいこと、こちらが決めたことを子どもに与える、というメリハリをはっきりさせる。

・子どもがそれとは気付かず、目的音が出た場合、はっきり間違わせて自己弁別させる。（気付き易いようにする）

※ この方法は、“はっきり間違わせる”わけですから、子どもからしたら、気持ちの良い状況ではありません。ですが、上手くいけば、自己弁別に持っていく上でかなり有効な方法なのです。でも一步間違えれば、通級をお辞めになるかもしれません。

『“はっきり間違わせて自己弁別させる”ことが、先生の目の前にいるお子さんにとって、本当に有効な方法なのか』の検討は、お忘れなく！

どのような状況の場合、このような方法を用いるのか、講義で話しておりますので、思い出し、思い出せない場合は、止めておくことが賢明です。どのような条件が揃うと有効な方法になるのか？ お考え下さい。

一つの方法が、全ての対象者に上手くいくなんていう方法は、世の中にありません。様々な方法、方法論から、目の前に存在する対象者に応じた、適合した方法を創造していきましょう！

また、指導の方法など、文献などに求め、それを参考にすることは大切なことです。でも、その文献に書いてある方法を目の前にいるお子さんに用いて良いかどうかは、別問題なのです。心して用いるようにしましょう。この講座で学んだこともです！ 念のため。

03B 先生へのコメントで紹介した『山形県言語障害児教育研究会編・ことばの教室の指導と運営・第三章指導について 1 総論』に是非、目を通してしてみてください。

・構音動態の確認を怠らない。どうしても聴覚のみに頼りがちである。視覚での確認が大切。上記のことばが、胸に刺さりました。子どもを出迎え、見送るまでの一つひとつの行為に隠された、指導する者の意図を知り、自分の**支援【?】**を振り返る機会となりました。〈今日のこの子はどんな子?〉子どもをどう理解するかと、毎回考えることを習慣化していきたいです。

《最後に、『構音指導』について》

順不動ですが、以下の5名お子さんの Before-After の動画は、ご覧いただくと一瞬で分かるでしょう、誤り方が、いかに異なるか、が。

AD03 ほとんどの発語を理解することが難しかった年長児まさと君の指導ビフォーアフター

AD14 不規則な発音の誤りを示した小学3年生：俊輝さんの初回検査及び通室26回目でのことばの様相

AD13 “鼻咽腔閉鎖機能”に問題のない小学3年男子の声門破裂音への構音(点)指導の Before-After

AD15 年長児とみおさんの [工] 列側音化構音に対する指導の Before-After

AD12 [才] 列の音が、聴覚的に「ん」に聞こえる構音の誤りのある年中児としおさんの指導の Before-After



AD13 の例のような“鼻咽腔閉鎖機能”に問題がないにもかかわらず、誤り方が“声門破裂音”になるお子さんについては、何例か指導の経験はあります。

AD03・14 のお子さんのように、全く何を指して発語しているのか理解できない子（恐らく、梅村の感度が低く受信できないのでしょう）、AD15 の [工] 列の構音障害、AD12 の [才] 列の構音障害に至っては、出会うのも全くの初めてですから構音指導も初めてなわけです。でも、アフターでの構音の様子は、どうでしょう。改善していると認めていただけませんか？

実は、この5名に行った指導と、本講座で最初に視聴・解説したまりさんへの指導は、その指導の“**方法論**”に於いては、同じなのです。

これが、「機能的構音障害に於いては、構音の誤り方に一喜一憂するのは止めましょう！ 指導（治療）の本質は、そこにはないのですから！」の“臨床的根拠”なのです。